

⑥ い業研究所（75年間の主な業績）

【 い業部門 】

昭和 30 年代

先刈の実用化技術が確立され、いぐさの収量安定・品質向上が図られた。産地の拡大により畳表の色調改善と色調統一を図るため、染土の統一が求められた。そこで、染土の種類と使用法の研究を行い、淡路産の「三原染土」を推奨染土に選定した。この染土は現在も使用されている。

昭和 40 年代

30年代後半からいぐさの人工乾燥法の試験研究が開始された。40年代後半からは大型乾燥機によるいぐさ束立て詰め乾燥試験が開始され、現在の機械乾燥法の基本技術を開発した。また、40年代前半からいぐさ収穫機の開発に取り組み、40年代後半には刈取りすぐり機を試作し、現在のいぐさハーベスタの開発につながった。

イグサシムシガの発生活長の研究により予察法と防除技術が確立され、より効果的な防除が可能となった。



ハーベスターによる収穫

昭和 50 年

県育成いぐさ「熊本1号」が奨励品種に採用された。

昭和 50 年代



いぐさの株分け・植付の省力化を目指して、いぐさ移植機の開発研究及び実用化技術の研究を行い、現在の機械移植の基本技術を開発した。

機械移植

昭和 59 年

県育成いぐさ「くまがわ」が奨励品種に採用された。「岡山3号」からの変異により得られた候補系統の中から選抜育成したもので、後期多分げつ型で機械化適応性を有する良質多収品種で、7月上旬収穫用として、昭和60年代には作付け面積の20%弱のシェアを占めた。

平成 2 年

県育成いぐさ「しらぬい」が奨励品種に採用された。「さざなみ」の自然交雑種子から得られた候補系統の中から選抜育成したもので、多分げつ型中細多収系統で、平坦地一般田の普通刈り栽培に適し、変色茎が少なく品質良好な品種であり、主として高品質指向農家の7月中旬以降収穫の圃場で、平成4、5年当時、作付け面積の10%を超えるシェアを占めた。

平成 10 年

県育成いぐさ「ひのみどり」が奨励品種に採用された。この品種は「せとなみ（母）」と「下増田在来（父）」の人工交配種子から得られた候補系統の中からの選抜により育成された。あわせて機械移植での栽培特性および加工特性が解明され、さらに専用染土の適性使用技術が開発された。茎が細く着花が極少で変色茎も発生がほとんどみられず美しい畳表が生産できるため、高級畳表用の品種として生産現場に受け入れられた。平成 20 年代には作付け面積の 50% を越えるシェアを占めるようになった。この品種の開発によって、国産は高級品、中国産は普及品という差別化戦略が可能となった。

平成 14 年

いぐさ「ひのみどり」の DNA による品種識別技術を九州沖縄農業研究センターとの共同により開発した。この技術の開発は、育成者権など知的財産保護の有効な手段となった。

平成 18 年

県育成いぐさ「夕風」が奨励品種に採用された。この品種は「いそなみ（母）」と「沖縄太い S1（父）」の人工交配種子から得られた候補系統の中からの選抜により育成された。関連技術として適加湿条件や花序制御技術が開発された。早刈圃場向けの品種として平成 22 年には作付け面積の 10% を越えるシェアを占めるようになっている。

平成 19 年

県育成いぐさ「ひのはるか」が奨励品種に採用された。この品種は「熊本 3 号（母）」と「広系 21002（父）」の人工交配種子から得られた候補系統の中からの選抜により育成された。関連技術として適加湿条件が開発された。晩刈圃場向けの品種として平成 22 年には作付け面積の 10% を越えるシェアを占めるようになった。



交配作業

以上の 3 品種の導入により、早刈「夕風」、普通刈「ひのみどり」、晩刈「ひのはるか」で全作期をカバーするラインナップが完成した。

なお平成 23 年時点において、熊本県は上記の 3 品種の種苗法による育成者権を所有している。



「夕風」の収穫株の姿

「ひのはるか」の収穫株の姿

左：「夕風」、右：「岡山 3 号」

左：「ひのはるか」、中：「岡山 3 号」右：「ひのみどり」

【 野菜部門 】

昭和 41 年

当時栽培されていたカボチャ品種は品質が悪く、生産が不安定であったことから園芸部で育種が行われていたが、昭和 33 に八代農業経営試験場が設立されるとこれを引き継ぎ、昭和 41 年には高品質カボチャ「熊本早生黒皮」を育成し普及に移した。

昭和 37～47 年

ビニルハウス内における温度等の微気象や温風暖房機等の環境制御機器の利用法等を検討し、保温特性や夜間の温度管理技術等を明らかにした。これらの成果はその後の施設野菜栽培の安定に貢献した。

昭和 41～45 年

ハウス栽培において連作障害が発生するようになったことから、発生機作の解明と対策技術の検討を行った。その結果、多肥による収量低下を認め、適正施肥量等を明らかにした。

昭和 50～平成 9 年

トマトの品種選定試験を行い、昭和 50 年には耐病性に優れる「ゆうやけ A」を有望とし普及に移した。また、平成元年にはすじ腐れ果の発生が少ない「天寿 1 号」および「天寿 5 号」を、平成 9 年には果実肥大性に優れる「桃太郎ヨーク」を選定した。

昭和 52～54 年

イチゴ育苗の水稲やいぐさとの労力競合回避や収穫時期の早進化を図る目的で、イチゴ「はるのか」のリレー栽培における高冷地（標高 1,000m）一貫育苗技術体系を確立した。

昭和 58 年

促成イチゴの平坦地育苗における花芽分化期の早進化や年内収量の増加、また、大量均一化を図るため、それまでの地床育苗に代わるポット育苗技術を確立した。

昭和 59 年

黒皮カボチャの作期の前進化に伴い、「熊本早生黒皮」に草勢が強すぎ着果性が悪い等の欠点がみられたことから、これらの欠点を改良した「ニュー黒皮」を育成した。

昭和 60 年

イチゴの新品種「とよのか」が県内に導入されたことから、品種特性を解明し栽培技術を確立した。

平成 4～7 年

イチゴ「とよのか」の花芽分化を安定的に早進化し年内収量の増加を図るために、低温暗黒処理、夜冷短日処理等の苗の低温処理による花芽分化早進技術を確立した。

平成 14～21 年

消費者の野菜に対するニーズが多様化し、トマトにおいては高糖度トマトの人気の高まっていることから、簡易隔離床を用いて灌水量を制限し、水分ストレスを与えることによる高糖度トマト生産技術を確立した。

平成 18～22 年

本県育成のイチゴ「ひのしずく」の花芽分化を促進し年内収量の増加を図るために、低温処理による花芽分化早進技術を確立した。

平成 19～22 年



タバココナジラミが病原ウイルスを媒介するトマト黄化葉巻病が発生しトマト生産に大きな被害を与えていることから、防虫ネットのハウス全面被覆による防除技術を確立した。また、本病に対する抵抗性品種の特性を明らかにした。

八代地域におけるトマトの栽培状況